

日本における岳飛“文芸”の展開

松 浦 智 子

一、緒言

明の中後期、出版文化の勃興に伴い、それまで文字化されることの少なかった物語芸能が、文芸作品として大量に書籍化されるようになった。そのなかには、「水滸伝」や「楊家将」「岳飛」の物語など、宋代の歴史的事跡を題材にあつかう「宋代もの」ともいえる一連の作品も多く含まれていた。

「宋代もの」文芸は、「宋の英雄的な武人・豪傑が、“忠義・忠国”を掲げながら内憂外患と戦う」という主題性を共通してもつ。例えば、本稿が検証の対象とする岳飛の文芸でいえば、『大宋中興通俗演義』（『大宋中興』）、『岳武穆精忠伝』（『精忠伝』。以下類似の題目を持つ書籍には弁別の便宜のために傍点を付す）、『岳武穆尽忠報国伝』（『報国伝』）などの小説に描かれる“忠国”の武将・岳飛が金と戦い南宋中興を成し遂げながらも秦檜に謀殺される」という流れが、まさにそれにあたる。

一方、これら「宋代もの」文芸の作品群が出現した明の中後期は、“北虜”や“南倭”といった外患や、泥沼の政治闘争や民変の多発といった内憂に悩まされた時代でもあった。こうした状況のもと、明の中後期には、宋の正当性を主張する劉刻編『少微家塾點校附音通鑑節要』続編（1429年成書）や商輅等奉勅撰『統資治通鑑綱目』（1472年成書）のように、朱

子の“正統論”を敷衍した“正統観念”を強く反映する歴史書が複数作られた¹⁾。そして、これらの歴史書の一部が、熊大木が編輯に関わった岳飛の小説『大宋中興』や楊家将の小説『北宋志伝』に取り込まれていることは、すでに先行研究で指摘されている通りである²⁾。

かくて、明代中後期に出現した「宋代もの」文芸には、当時の対外観念を反映し、内憂外患と闘う宋の武人の姿が描かれるようになっていた³⁾。

ここで、視点を岳飛の通俗文芸に絞ってみると、このことをさらに示す書籍がある。岳飛の伝や詩文を集めた『会纂宋鄂武穆王精忠録』（『精忠録』）である。この『精忠録』は、1449年に英宗が“北虜”エセン軍に拉致された土木の変を契機に制作されたものであり、そこにはやはり当時の対外観念が反映されている。一方、岳飛の通俗文芸たる小説『大宋中興』には、この『精忠録』の絵図と内容を踏まえた形跡が残っており、また『会纂宋鄂武穆王精忠録後集』（『精忠録後集』）という『精忠録』を継承すると思われる附録も残っている。そして、この小説『大宋中興』は、その後には作られた『精忠伝』や『報国伝』という岳飛小説の底本となっていた⁴⁾。つまり、岳飛の通俗文芸は、明代当時の“北虜”の外圧に連動して編纂された複数の書籍を重要な淵源として成り立っていたことになるのである。

こうした文脈のもと“忠義の武人”として描かれた岳飛の姿は、同様に内憂外患という難問に直面していた明中後期の人々の心情に適合するもの

1) 中砂明徳『江南—中国文雅の源流』（講談社、2002）第三章「通鑑一族の繁衍」参照。

2) 高津孝「按鑑考」（『鹿大史学』39、1992）、上田望「講史小説と歴史書（3）『北宋志伝』『楊家将演義』の成書過程と構造」（『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』3、1999）、上田望「講史小説と歴史書（4）英雄物語から歴史演義へ」（『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』4、2000）等。

3) 岳飛の通俗文芸と「国家」「民族」観念との関係については、笠井直美「〈われわれ〉の境界—岳飛故事の通俗文芸の言説における国家と民族」上下（『言語文化論集』23（2）、24（1）、2002）、松浦智子「明代内府で受容された宋の武人の絵物語—とくに岳飛の物語から」（『宋代史研究会報告集（11）宋代史料への回帰と展開』汲古書院、2019）等参照。

4) 『大宋中興』と『精忠録』『精忠録後集』の関係については、石昌淦『朝鮮古銅活字本《精忠録》與嘉靖本《大宋中興通俗演義》』（『東北アジア研究』2、1998）、大塚秀高「歴史演義小説の図像の淵源」（『埼玉大学紀要（教養学部）』47（2）、2012）、涂秀虹『精忠録』（上海古籍出版社、2014）所収「前言」、前掲注3拙稿2019参照。

であったと考えられる。ならば、岳飛の通俗文芸が明の中後期に多くつくられたのには、出版文化が勃興したという要因以外に、物語の主題性と時流が相互に作用したという要因があったと指摘できるだろう。

二、江戸期の岳飛“文芸”

(一)、江戸初期・中期の岳飛“文芸”

文芸が、その素材のもつ主題性と時流との相関性の中で、形態を変容させていくという事例は、まさに日本における岳飛“文芸”の受容と展開のありようにも如実に見て取れる。

日本における岳飛“文芸”の初期の受容・展開の基礎は、先述の『大宋中興』などのような通俗文芸や、『統資治通鑑綱目』といった通鑑系をはじめとする史書、そして明後期に編纂された『精忠録』などの岳飛の伝や詩文集などに支えられていた。これらの漢籍は、多くが江戸以降に将来されたものであった。岳飛とその事跡についての知識は、まず、こうした漢籍を手にとることができ、かつ漢籍を解することのできた儒学者、医者、士人などの識字層に最初に浸透していった。

例えば、江戸初期の儒者の林羅山（1583－1657）である。朱子学を奉じ幕府の教学の基礎をつくった羅山は、「岳飛」と題する二首の画賛をなしている。羅山はまず、正保2年12月（1646年1月）に「三十六武将図中四人」⁵⁾で岳飛を「武穆戦功立，精忠誰敢及。閩外屬將軍，長恨金牌急」と詠み、次いで翌正保3（1646）年9月に「三十六将図中十二人」⁶⁾で

5) 『羅山林先生詩集』（『羅山林先生文集』万治2年跋、寛文2年刊）巻69所収。また、この画賛の注として「吏部大卿源忠次（榊原忠次）屏風、正保二年十二月、應其求作之賛。然此時有病故、僅賛左右始末、其餘三十二將、使恕靖作之」との文言が記される。

6) 同前掲注5書巻69所収。また、この画賛の注として「春齋家藏屏風。正保三年九月作之賛。其餘二十二將、使春齋函三作之」との文言が付される。

「中原恢復一生涯、只恨姦臣和議邪。馬上胡兒相戲虎、我軍倚頼岳爺爺」
と詠んでいる。ここに詠まれる岳飛についての知識は、羅山の手元やその
周辺にあった、史書を始めとする漢籍に基づくものだと考えられる⁷⁾。

二首の画賛のうち前者は、榊原忠次（松平忠次、1605-65）所蔵の「三
十六武将図」屏風に対して作られたものであり、忠次は林羅山や本朝通鑑
を編纂したことでも有名な林鷺峰（春斎。羅山の息子。1618-80）と付き
合いのあった好文大名として知られる人物であった⁸⁾。また後者は、鷺峰
が家蔵する「三十六武将図」屏風に対して作られたものであり、鷺峰は、岳
飛の通俗小説『大宋中興』の明万曆余氏三台館本も所蔵していた。これら
一連の事象からは、①当時、中国の武将・名臣を題材とする絵図屏風が少
なからず所蔵され、それをもとに画賛を為すなど文芸活動が行われていた
こと、②当時の日本の儒者にとって歴史を題材とする通俗文芸は史書に類
似する「漢籍」であった可能性があること⁹⁾、などが読み取れるだろう。

その後、江戸中期になると、儒学を始めとする学問の裾野が広がるのに
伴い、漢籍を解する識字層も拡大していった。そうしたなか、文芸をもの
する余裕のある商人層から、『大宋中興』を“翻訳”した入江若水（1671
-1729）が登場した¹⁰⁾。若水は摂津富田の酒造家であったが、鳥山芝軒
（1655-1715）や伊藤東涯（1670-1736）のもとで漢詩や儒学を学び、ま
た江戸の荻生徂徠（1666-1728）とも親交があった。彼は享保6年
（1721）に、『大宋中興』の“翻訳”本に『通俗両国志』と名付けて、京の

7) 羅山の読書歴については『羅山林先生文集』附『羅山林先生集附録』巻1「年譜上」に見える
読書目録他を参照。

8) 榊原忠次と林家の関係については、竹下喜久男「好文大名榊原忠次の交友」（『鷹陵史学』17、
1991）、廣木一人「榊原忠次・政房の池之端屋敷—林家・脇坂安元・松平忠房などとの文学交流の場—」（『和歌文学研究』114、2017）他参照。

9) 前掲注7『羅山先生集附録』附録巻1「年譜上」の羅山の読書目録に「史記、漢書、後漢書、荀
悦漢紀、袁宏後漢書、呉越春秋、通俗三国志演義、唐鑑、通鑑項目、十八史略」とあり、『通俗三国
志演義』と史書類が並列して記されていることも、このことを示している。

10) 以下、入江若水の経歴については、『近世大阪芸文叢談』（大阪芸文会、1973）所収日野龍夫
「入江若水伝資料」を主に参照。

著屋勘兵衛の書肆から刊行したのだが、この“翻訳”に先立つ宝永2(1705)年にすでに、大阪池田の医師清地以立(1663-1729)が明余邵魚『春秋列国志』を“翻訳”した『通俗列国志』¹¹⁾にも序を寄せていた。

このように、若水の興味が白話混じりの中国通俗小説の“翻訳”にあったのは、この当時徂徠門下を中心に高まっていた唐話研究の気運も関係していたと思しい。周知の通り、徂徠の護園学派では古文の理解のため中国通俗白話作品なども使い唐話研究を熱心に行っていたが¹²⁾、若水は宝暦年間に、その徂徠のもとをたびたび訪問し、護園学派の人士と交流を重ねていた¹³⁾。そして、この宝暦年間という時期は、まさに若水が清地以立の『通俗列国志』に序を寄せていたのと同時期であった。ならば、彼の中国通俗小説“翻訳”に対する関心は、こうした交流のなかから影響を受けて醸成されていた部分があったと推定できるだろう。

一方、若水は『通俗両国志』“翻訳”の際に原作『大宋中興』にないエピソードを唐代小説などから借用して挿入し、作品の娯楽性を高めることもしている¹⁴⁾。こうした“翻訳”態度は、元禄から享保の間に出現した一連の中国の歴史小説の“翻訳”作品、すなわち一連の通俗軍談に通底するものであった¹⁵⁾。

このような背景のもと出現した岳飛“文芸”の『通俗両国志』であるが、

11) 『通俗列国志』43巻は、宝永2年の刊記をもつ前編『通俗武王軍談』25巻と、元禄16年の刊記をもつ後編『通俗呉越軍談』18巻からなり、前編に若水の序文が収められる。

12) 中国の通俗小説の和訳と唐話研究の関係性に関しては、石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』(清水弘文堂書房、1940)、中村綾『日本近世白話小説受容の研究』(汲古書院、2011)他参照。

13) 前掲注10日野論考参照。また、厳密に言えば、護園学派で「訳社」が開催されるのは宝永年間の直後の正徳元年(1711)からであるが、訳社開催以前より護園学派で唐話研究に対する興味や動きがあったと考えることには問題はないだろう。

14) 徳田武編・解説『対訳中国歴史小説選集8 新刊大宋中興通俗演義』(ゆまに書房、1983)「解説」の指摘による。

15) 通俗軍談の研究については、中村幸彦「通俗物雑談：近世翻訳小説について」(『関西大学東西学術研究所紀要』15、1982)、徳田武『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店、1987)第1部「読本前史」、同前『対訳中国歴史小説選集』(ゆまに書房)シリーズ他参照。

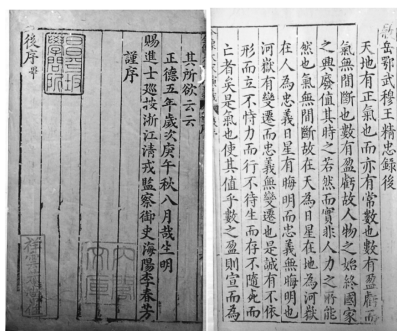


図1 『大宋中興』巻十 附『精忠録後集』
李春芳序、国立公文書館内閣文庫蔵本

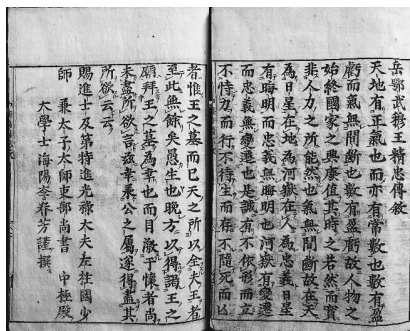


図2 入江若水『通俗両国志』
李春芳序、松浦個人蔵本

注目されるのは、若水がその翻訳・編集に際して、『大宋中興』の冒頭にあった熊大木の序を削除して、代わりに『大宋中興』の附録『精忠録後集』に収録される李春芳の「重刊『精忠録』後序」(図1)を序として『通俗両国志』の冒頭(図2)に附したということである¹⁶⁾。つまり、若水は『精忠録』を『大宋中興』の一部であると認識しており、かつ明代中後期の“北虜”の外圧のもと生じた対外観念を反映する『精忠録』の序が、岳飛“文芸”の冒頭を飾るにふさわしいと考えていたことになるだろう。

(二)、江戸後期・幕末維新期の岳飛“文芸”

こうした文脈をもつ岳飛小説の“翻訳”の登場などの流れも受け、岳飛“文芸”は、江戸後期になると、君主への忠義を謳う大義名分論や「正統」意識、そしてこれらと連続性をもった歴史叙述への関心などと関わりながらさらに拡大していく。

例えば、“尊王”思想を打ち出す『日本外史』を著し、水戸学系統の人々

16) また、『通俗両国志』の冒頭には、林羅山の「武穆戦功立…」の詩も附されていることも注目される。

や幕末の“志士”に影響を与えたことで知られる頼山陽（1781－1832）である。頼山陽は、まず江戸の昌平黉で朱子学を学んでいた寛政9（1798）年に「武将賛三十首」の「岳飛」で「運用之妙，存乎一心。惟此兩言，超出古今」（『頼山陽詩集』巻2）と『宋史』「岳飛伝」の文言¹⁷⁾を踏まえた賛を認めている他、文化11（1814）年には画賛「岳飛」において「唾手燕雲志已空，兩河百郡虜塵重。西湖贏得墳三尺，留與遊人認宋封」¹⁸⁾（『頼山陽詩集』巻9）と、華北地域の奪還を目前に獄死に追いやられた岳飛の無念を詠んでいる。

頼山陽の岳飛に対する知識もやはり歴史とその叙述に対する興味の中から得られたものだと考えられるが、彼の歴史叙述に対する態度には注意される点がある。というのも、頼山陽は、『日本外史』を作成する際、叙述にドラマ性や臨場感を加えるために、歴史通俗文芸たる軍記物の描写や内容を一部利用していたからである¹⁹⁾。ここには、歴史叙述と歴史通俗文芸の連続性が見て取れるが、彼のこうした歴史叙述に対する態度は中国の歴史にも向けられていた。例えば、それは「三国志演義序」（『頼山陽文集』「外集」）や「詠三国人物十二絶句」（『頼山陽詩集』巻18）という形で現れていた。

そしてもう一点、注意されるのは、頼山陽がこうした歴史叙述を、わかりやすく、朗読しやすい漢詩・漢文で書いていた、ということである。例

17) 『宋史』巻365「岳飛伝」「陣而後戰，兵法之常，運用之妙，存乎一心」。

18) 谷口匡「頼山陽『西遊詩卷』訳注（三）」（『下関市立大学論集』43（2）、1999）によれば、「西遊詩卷」所収の「題画像七首、武穆」「痛飲黃龍志空，兩河百郡虜塵重。西湖贏得墳三尺，留與遊人認宋封」は、本詩の初案であるとされる。

19) 例えば徳富蘇峰（1863－1957）は、頼山陽の『日本外史』を読むのは「馬琴の『八大傳』や『羅貫中の『水滸傳』を読むのと「大差ない」ものだと述べた上で、その著述スタイルを「劇作家的眼光を以て之を觀、劇作家的筆を揮うて之を描き出」すものと指摘している（徳富猪一郎『頼山陽』（民友社、1926）第十六『日本外史論』）。実際、頼山陽は『日本外史』の叙述にドラマ性をもたせるために、合戦の時間や兵の数を変えるなど、小説家的な手法で執筆を行っていることは有名である。『日本外史』と歴史叙述については、中村真一郎『頼山陽とその時代』（中央公論社、1971）、斉藤希史『漢文脈と近代日本』「第一章 漢文の読み書きはなぜ広まったのか——『日本外史』と訓読の声」（角川ソフィア文庫、2014）他参照。

えば、『日本外史』は「諳誦に適した、つまり人間の呼吸に自然に合致した、見事な雄弁調」²⁰⁾の漢文で書かれていたため、全国に普及し、幕末の尊王や攘夷運動に大きな影響を與えることとなった。つまり、頼山陽のドラマティックな歴史叙述は、朗誦性を重視した漢詩文の文脈の中で展開されていたのであり、この叙述手法は作者・受容者双方の精神を昂揚させる機能を備えていた。その意味で、頼山陽の歴史叙述の手法は、岳飛“文芸”のもつ“忠義・忠国”的な主題性とよく合致するものであったといえよう。頼山陽の「岳飛」詩・賛は、こうした歴史叙述の文脈なかから出現したものでもあった。

ドラマティックな手法で“忠義・忠国”という主題性をリズム良く叙述するような歴史文芸は、動乱に向かう当時の時流にもよく合致していたと考えられる。それを示すように、幕末維新の動乱期になると、岳飛“文芸”は、朗誦による昂揚が得られやすい漢詩の形で、とくに後期水戸学や尊王思想に傾倒した人々の手により活発に作られていく。

例えば、幕末の“志士”として知られ、安政の大獄で処刑された橋本左内（1834-59）である。頼山陽の『日本外史』の熱心な読者でもあった左内は、「宋岳飛を慕い自ら景岳と号」²¹⁾した人物でもあった。岳飛に対する興味から、左内は岳飛に関する詩文を渉猟し²²⁾、自身も岳飛を題材にした漢詩を複数つくった。安政5（1858）年中頃の作である「書懷」第二首（『景岳詩文集』第1）では、「寶刀傳祚武功巍，北虜東夷王化歸。一自埤關鎖鑰，遂俘廷議誤樞機。相臣翻恨無秦檜，都督寧論不岳飛。禦侮折衝今日是，孰航西海耀皇威」と、和平派の秦檜と主戦派の岳飛を詠むことで、開国に関わる当時の政情を評している。また、安政5年10月以降、越前藩邸内で謹慎の身となっていた頃の作である「偶詠五首」の第四首、第五

20) 前掲注19中村著書「第六部山陽の学芸、一『日本外史』」。

21) 『橋本景岳全集』（復刻、東京大学出版会、1977）所収「橋本景岳先生年譜」。

22) 『橋本景岳全集』「第十雜記抄録類」参照。

首では、「淮陰嘗坐法，武穆亦將刑。危矣二公命，風燈照面青。／莫須有嶽成，不説壞長城。獨有皇天諒，燕雲尚繫情」（『景岳詩文集』第2）と詠み、“功臣”でありながら処刑された韓信や檀道濟そして岳飛に、自身を擬えることで、自身の幽囚の現状を憂えている。そして、左内はこの翌年、江戸伝馬牢にて処刑された。

また、やはり頼山陽の『日本外史』の愛読者であり安政の大獄で処刑された吉田松陰（1830-59）も、安政6（1859）年3月5日、「韓世忠岳飛」と題する漢詩をなしている。当時、長州の野山獄にあった松陰は、「秦檜當國難與爭，杜門謝客不言兵。盡忠報國赫々名，此人不死和不成。韓岳忠武難弟兄，千歲吾尤悲鵬卿」（『己未文稿』）と詠み、“尽忠報国”の名をとどろかせた岳飛が死に至ったことを、自身の境遇に重ねながら慷慨している。松陰はこの半年後、左内と同じく江戸伝馬牢にて処刑された。

さらに、橋本左内らともつながりのあった西郷隆盛（1828-77）も、明治6（1873）年の政変の直後になした「辞闕」詩において、「獨不適時情，豈聽歡笑聲。雪羞論戰略，忘義唱和平。秦檜多遺類，武公難再生。正邪今那定，後世必知清」（『西郷隆盛全集』「漢詩」）と、自身を岳飛に擬えながら、内治優先の大久保利通らの反対により自身の朝鮮派遣が取りやめになったことへの不満を訴えている。西郷はこの4年後、西南戦争のなか自刃した。

また、尊王運動に奔走し西郷とも親交の深かった副島種臣（1828-1905）も、岳飛の詩を複数作った。特に、明治6年の政変で下野した後、清国滞在中（1876-78）に西湖畔の岳飛廟を訪れてなした「岳武穆廟」詩は、「嗚呼岳公何早死，若不早死國之祉。中原可復敵可殲，王室豈至咏如燬。奸人悞國古來同，忠而得死不獨公。唯公之死尤慘怛，唯公之忠尤大忠。帝鑑孔章靈在天，墓木南向悲偶然。鼓厲天下忠義氣，後賢宜須則前賢。千載之下欽高義，自東海來表敬意。維時十月天如拭，湖山呈送清明色」（『蒼

海全集』巻1)と、わかりやすい漢語で岳飛の“忠”を高らかに称揚するものであったため、その後、数多くの詩吟教本の素材となり、岳飛“文芸”の展開にも一定の影響を與える存在となった。副島にはこのほか、「觀岳飛書」(『蒼海全集』巻3)などの作もある。

このように、幕末・明治維新の動乱期には、“忠義・忠国”の岳飛という素材を、朗誦性を備えたドラマティックな手法で叙述する漢詩が、複数つくられていた。このうち、橋本左内、吉田松陰、西郷隆盛が、刑死や自刃といった動乱期を象徴するような最後を迎える途上において、自身の主張を叙情的に訴えるために、岳飛“文芸”を利用していていたことは注目に値するだろう。

一方、こうした幕末・明治維新时期における岳飛詩の頻出化と歩調をあわせるように、幕末には、岳飛に関連する伝記・資料集的な書籍が複数刊行されていた。例えば、嘉永4(1851)年には、『宋史』「岳飛伝」とその他雑記に掲載される岳飛関連の記事を収載した『岳飛本伝』一冊が江戸の尚友堂から、文久3(1863)年には、明末單恂編『岳忠武王集』(『岳忠武』)一冊の和刻本が江戸の書肆・玉巖堂和泉屋金右衛門から刊行されていた。両者はともに学問所にも所蔵されるなど広く出回っており²³⁾、幕末の政情を大に小に動かした人々の眼に触れていたと思われる。このことを示すように、例えば、幕末の尊攘派に強い影響を与えた後期水戸学と、これら岳飛の伝記・資料集の関係性が、後者の『岳忠武』の刊行背景に強く見て取れるのである。

『岳忠武』の冒頭には、水戸の江戸詰の藩士・寺門謹(政次郎)の序文と、頼山陽の「運用之妙、存乎一心。惟此兩言、超出古今」賛、そして岳飛の図像が付されている。このうち、序文を為した寺門謹は、後期水戸学派の代表的人物で、幕末の尊攘思想に大きな影響を與えた会沢正志斎

23) 例えば国立公文書館内閣文庫蔵本は、ともに昌平黌の旧蔵書である。

(1782-1863)の甥であった²⁴⁾。

会沢正志斎は、『岳忠武』を刊行した江戸の書肆・玉巖堂和泉屋金右衛門(太田金右衛門)²⁵⁾と付き合いが深かったようで、例えば、文久元(1861)年には、師の藤田幽谷(1774-1826)の言行を記した『及門遺範』を玉巖堂から刊行しているほか、自身の著述全集を後日玉巖堂より上梓する予定にもあったようである(ただし、これは会沢正志斎の病死により実現しなかった)²⁶⁾。両者の昵懇関係は、玉巖堂が水戸藩藩学蔵版物の請負(水府御蔵版書目売捌所)をしていたことにも起因しているようで、玉巖堂主人の和泉屋金右衛門は会沢正志斎だけでなく後期水戸学の大家・藤田東湖(1806-55)とも強い繋がりを持っていた。

こうした交流関係が確認できる時、『岳忠武』の刊行に関して着目されるのは、会沢正志斎が寺門謹に宛てた文久元(1861)年から文久2(1862)年の書簡に、「岳文跋」「岳序」「岳序之事」「岳文序」「宋名臣言行」との文言が、和泉屋金右衛門とのやりとりに言及する中で繰り返し登場するということである²⁷⁾。これらのことを勘案すれば、『岳忠武』は、会沢正志斎の死後、その意向を汲んだ寺門謹が、後期水戸学派に親しい玉巖堂から出版するよう差配したものだったと考えられるだろう。

このように、後期水戸学と深い関わるなかで刊行された『岳忠武』であるが、上述の通り、その冒頭には頼山陽の「運用之妙、…」賛が寺門謹の

24) 寺門謹(政次郎)については『会沢正志斎書簡集』(思文閣出版、2016)「解題」他参照。

25) 江戸末期の書肆・玉巖堂和泉屋金右衛門すなわち太田金右衛門については、服部清道「江戸の書肆和泉屋金右衛門」(『風俗』6(3)、1967)、奈良勝司「会沢正志斎の政治思想と著作出版事情」(前掲注24書所収)に詳しい。また、服部氏、奈良氏の論考では言及されていないが、明治以降、金右衛門は書肆を閉めて郵便事業の請負人となり、明治5(1872)年には、前島密の依頼を受けて郵便報知新聞の発行を担った。この郵便報知新聞は、現在なお発刊されている報知新聞の前身である。幕末・明治初期の書肆と文芸の出版、そして近代新聞メディアの関連を考える上で、これらの情報は注目に値するだろう。

26) 桐原健真「会沢正志斎と「水戸学」の系譜—幕末から戦後まで」(『近世近代移行期の歴史意識・思想・由緒』岩田書院、2017)。

27) 『会沢正志斎書簡集』(思文閣出版、2016)第210-222頁参照。

序とともに附されている。このことは、当時の岳飛“文芸”の広がり、朗誦性を備えたドラマティックな漢詩の普及とともにあったことを示しているだろう。つまり、幕末期の岳飛“文芸”は、作者・受容者双方の精神を高揚させる叙述・文芸スタイルを獲得・定着させることで、その“忠義・忠国”といった主題性をより“純化”させ、動乱の時流の中でその出現の機会を増やしていた、と考えられるのである。

三、近代日本と岳飛“文芸”

ここまでの流れを整理すると、江戸初期の岳飛“文芸”に比して、江戸後期から幕末・明治維新という動乱期の岳飛“文芸”には、質・量ともに変化が見えることがわかる。とくに幕末・明治維新时期に複数つくられた岳飛“文芸”では、岳飛の“尽忠報国”“忠義”たる側面が、叙情的に強調されるようになっていた。これは、“内憂外患”に直面した明中後期において、当時の対外観念を反映した岳飛文芸が多く作られたのと類似する現象だと言えるだろう。

ただし、江戸後期から幕末・明治維新时期に岳飛“文芸”が広がりを見せたとはいえ、その受容・展開の範囲は、やはり漢籍・漢文・漢詩を解する上級識字層が中心であった。しかし、明治以降、新国家形成の過程において、天皇のもと国内統一、富国強兵、臣民教化などが重視されるようになると、近代学校教育と相関しながら、岳飛“文芸”の裾野は一気に広がりを見せることとなる。

そこで本稿では、以下、明治、大正、昭和から第二次世界大戦期にかけての岳飛“文芸”が、その質・量を変化させ、受容・展開の裾野を広げていく様子を、主に国立国会図書館に所蔵される諸資料を手がかりとして分析していく。

(一)、学校教育の教材に見える岳飛

明治以降の岳飛“文芸”のありように大きな影響を与えたものの一つに、「富国強兵」を一つの目標として設計された近代学校教育があげられる。

日本の近代学校教育は、明治5（1872）年の学制公布以降に始まったが、その全体的な方向性を決めたのは、明治12（1879）年に侍講の元田永孚（1818－91）が天皇の意向を汲んで起草した「教学聖旨」²⁸⁾であった。「教学聖旨」は、その後明治23（1890）年に「教育勅語」に結びつき、日本の近代学校教育を「仁義忠孝」の涵養といった儒教的な徳育主義、すなわち臣民教育の方向にむかわせた。

かくて、臣民教育の場としての近代学校の性格を決定づけた「教学聖旨」であるが、そこでは、とくに忠良なる臣民を育成する上で不可欠な「忠孝」の涵養が重視され、「小学校にて、…古今の忠臣、義士、孝士、節婦の画像、写真を掲げ、…その行事の概略を説諭」することで、「忠孝の大義」を子供の「脳髓に感覚せしめ」る必要性が説かれた。そして、子供のうちから忠臣の具体的なイメージを「脳髓」にすり込むというこの提起は、まず、明治15（1882）年にできた修身書『幼学綱要』²⁹⁾において着実に実行された。

『幼学綱要』は、同じく元田永孚が明治天皇の勅命で編纂したもので、「孝行」「忠節」など12の徳目にまつわる人物の話（全229話。うち、117話が中国の人物の事跡）を松本楓湖（1840－1923）の62枚の挿画とともに示した児童用修身書である。この中の「忠節第二」に「宋の岳飛、高宗の爲に忠節を尽す」の話が、「宋の岳飛詔を奉して師を班するとき³⁰⁾、河南

28) 「教学大旨」と「小学条目二件」の二つの文書からなる。元田永孚と「教学聖旨」については、森川輝紀『教育勅語への道』（三元社、1990）、沼田哲『元田永孚と明治国家』（吉川弘文館、2005）他参照。

29) 『幼学綱要』については、中村格「天皇制教育と正成像：『幼学綱要』を中心に」（『日本文学』39（1）、1990）、杉江京子「『幼学綱要』挿画成立事情考—松本楓湖「五姓田芳雄・月岡芳年との関わりをめぐる」」（『美術史研究』49、2011）他参照。

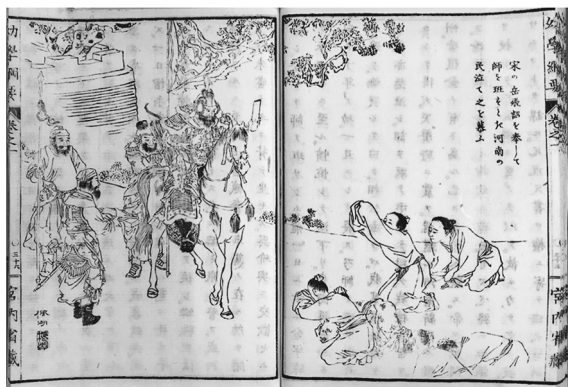


図3 『幼学綱要』（明治16年版）巻1 “宋の岳飛、高宗の為に忠節を尽す” 挿画、国立公文書館内閣文庫蔵本

の民泣きて之を慕ふ」と題する挿画付きで記されているのである（図3）。この岳飛の話は、『宋史』『岳飛伝』に基づくものだと考えられるが、挿画付きのかみ砕いた訓読文で描写されているため、それ以前の岳飛“文芸”に比べてかなり理解しやすいものとなっている。まさに、子供の「脳髓」に「感覚」させる設計だといえよう。

その後、『幼学綱要』は、昭和20（1945）年の敗戦まで刊行され続け、全国各地の学校に頒布された。そのため、その影響力は非常に大きく、ここに示された「忠孝」の人物たちの話は、その後、かなりの確率で学校教育の教科書に教材として受け継がれるようになった。岳飛の話も例外ではなく、とくに中学校高学年の漢文教科書ではよく用いられる題材となった。例えば、国立国会図書館所蔵の明治19（1886）年の検定制度以降の中学校漢文の教科書をみると、岳飛関連の教材が以下のように採られている。

これだけの数の教科書が明治、大正、昭和の各時期に、バリエーションある岳飛の教材を扱っていたのである。国は、教科書を通してあるべき臣

30) 画題の文言は国会図書館所蔵同書大正7年版によって一部校訂。

	教材題名	著者・出典	所収教科書（M 明治、T 大正、S 昭和）
1	乞出師割	宋岳飛	M26、松本豊多『漢文中學読本』巻3下 M28、深井鑑一郎『中學漢文』第4上 M32、深井鑑一郎『改訂中學漢文』巻9 M32、遊佐誠甫等『中等漢文読本』巻6 M32、山室茂次郎『中學漢文津梁』巻6
2	岳忠武王小伝	明単恂	M26、松本豊多『漢文中學読本』巻3下 M32、遊佐誠甫等『中等漢文読本』巻6 M32、山室茂次郎『中學漢文津梁』巻6
3	岳飛精忠 (岳飛、宋高宗紹興十一年)	(續) 通鑑綱目	M39、秋山四郎『新撰漢文読本』巻9 M43、簡野道明『再訂新編漢文教科書』巻5 T2、漢文研究会『新編漢文読本参考書』巻5 T6、久米卯之彦等『中學漢文和訳自修書』 S12、大東文化協會『皇國漢文読本』第5學年 S19、文部省編『中等漢文』第3
4	岳忠武王伝	通鑑輯覽	T7、青木晦蔵『中等漢文読本』巻3
5	岳飛梗概	宋史	S11、遠藤隆吉『中等漢文読本』入門編
6	題青泥市寺壁	宋岳飛	M39、秋山四郎『新撰漢文読本』巻9 M43、簡野道明『再訂新編漢文教科書』巻5 T6、久米卯之彦等『中學漢文和訳自修書』
7	題伏魔寺壁	宋岳飛	T7、青木晦蔵『中等漢文読本』巻3
8	岳王墓		M39、秋山四郎『新撰漢文読本』巻9 T7、青木晦蔵『中等漢文読本』巻3
9	岳飛	清鄭元慶	M28、深井鑑一郎『中學漢文』第4上
10	岳飛論	清廖燕	M28、深井鑑一郎『中學漢文』第4上
11	擬褒崇岳忠武王議	清魏禧	M28、深井鑑一郎『中學漢文』第4上
12	宋武穆王著述跋	室鳩巢	M32、山室茂次郎『中學漢文津梁』巻6
13	岳武穆故里	竹添光鴻	M32、山室茂次郎『中學漢文津梁』巻7
14	岳飛伝	福永亨吉	M42、福永亨吉『漢文副読本』巻2

(中学校漢文の教科書は国会図書館所蔵本以外にも数多くあるが、本稿は教育史を検証することを主目的とするわけではないので、紙幅の関係上ここではこれ以上述べない³¹⁾)

民の姿を全国に浸透させようとしていた訳であるから、当時のマスメディアの貧弱さも考慮に入れば、教科書媒体による岳飛に関する知識の拡散力は相当なものだったと言えよう。これが、岳飛“文芸”の広がりの下地をつくっていたと考えられるのである。そして、それを裏付けるように、教科書を通した岳飛関連の知識の浸透と同期して、児童向けの岳飛“文芸”が次々と登場した。

(二)、明治期の岳飛“文芸”

最初期の児童向け岳飛“文芸”は、学校制度の普及を背景として、明治20年代に児童・少年向け雑誌や文芸が陸続と刊行されるという³²⁾動きのなかで出現した。

まず、明治26(1893)年9月、博文館の『幼年雑誌』3(18)号に、幸田露伴(1867-1947)の「岳忠武王の遺事」という文章が2枚の挿絵とともに掲載された。叙情的な文言体で書かれる「宋の岳飛が支那に於いて関羽以来唯一人の大丈夫たることは幼年諸氏も知れるなるべし」という文冒頭と、「我が邦近來の豪傑西郷隆盛岳公の書を学びたりといふよしなり。隆盛の性行を考ふるに或いは公の人となりを慕ひて学びしものか非耶。隆盛の書実にまた公の書に似たるどころあり」という文末尾は、露伴のこの文章が、①露伴自身の中国通俗文学に対する関心・素養と、②江戸・幕末維新以来の岳飛“文芸”の流れの上に成り立ったものであることを示しているだろう。さらに、文中で「忠義」「大忠臣」「尽忠報国」「赤心」「大孝

31) 明治以降の漢文教科書については、石毛慎一『日本近代漢文教育の系譜』(湘南社、2009)、木村亨「明治・大正期の漢文教科書」(中村春作他『「訓読」論続』、勉誠出版、2010)、『明治期漢文教科書集成』(不二出版)加藤国安「第Ⅰ期・第Ⅱ期解説」(2013)「第Ⅲ期解説」(2015)他参照。

32) この動きが学校教育と相関したものであったことは、近代児童雑誌の源流といわれる『少年園』が、明治21(1888)年に、文部省御用掛の教科書編集者であった山県悌三郎によって児童の学習補助を目的に創刊されたことによく現れている。井内美由起「博文館少年雑誌における木口木版—科学欄とボンチ絵を中心に」(『国文学研究資料館紀要(文学研究篇)』44、2018)の指摘による。

子」「大英雄」「真の武人」「利己の卑心無き」等の語がくり返し使われ、そこに挿画が附されているという事象からは、この文章が、「教学聖旨」以降の国の教育方針を反映させたものであったことが読み取れるだろう。露伴が文中に引用する岳飛「題伏魔寺壁」詩が、後に漢文教科書に教材として採られていることも、この文章の学校教育との近さを物語っている。

その後、明治32(1899)年12月には、同じく博文館が刊行する児童向け伝記叢書「世界歴史譚」³³⁾から、笹川種郎(臨風。1870-1949)³⁴⁾著・渡辺金秋画『岳飛』が出版された。「緒言」に「宋史本伝を基とし、傍ら宋史、金史、岳忠武王文集(八卷)、和刻岳忠武王集(一卷)及び二三の書を参考して僅に此著をなす」とあるように、笹川臨風は史書や岳飛の資料集等に基づいてこの伝記を作成している。東京帝国大学史学科を卒業した彼にとっては、こうした作業はなじみのあるものだったと考えられ、その文体も露伴の「岳忠武王の遺事」にくらべ、叙情性を排した固めの訓読体となっている。

ただし、文中では「忠義」「勤王」「志」「忠君」「愛国」「孝子」「忠孝」「忠義報国」「忠烈」「烈士」「精忠」「赤子」等の語がくり返し使用されているほか、書中には7枚の劇画調の挿画も附されている。つまり、この伝記も、「画像」を使い「忠孝の大義」を子供に理解させるようとする「教学聖旨」以降の教育方針を汲んで出現したものだったということが指摘できるだろう。

さらに、書中にたびたびあらわれる笹川の評論も注目される。例えば、

33) 「世界歴史譚」については、勝尾金弥「伝記叢書『世界歴史譚』の著者たち」(『愛知県立大学文学部論集(児童教育学科編)』37、1988)、同前「伝記叢書『世界歴史譚』考」(『児童教育学科論集』22、1989)に詳しい。

34) 笹川臨風は、日本で最初に中国の小説戯曲についての専著『支那小説戯曲小史』(東華堂、1897)を上梓したことでも知られる人物である。笹川臨風については、平野晶子「笹川臨風」(『近代文学研究叢書』66、昭和女子大学近代文学研究所、1992)、西上勝「人情の探求と小説史の構築—笹川種郎著『支那小説戯曲小史』をめぐる」(川合康三編『中国の文学史観』、創文社、2002)他参照。

「支那」について論ずる部分では、「支那なる問題は東亜に於ける、否寧ろ世界に於ける今後の一大疑案に属せり。而して実に靖康の禍は支那中国が蛮夷の爲に被りたる打撃中其最大なるものの最初ならずんばあらざるなり」と北宋末期の靖康の変に関係づける形で明治当時の政局論を挟み込んでいる。こうした論評は他にも複数みえるのだが、そこには、“忠君・忠国”という主題性をもつ岳飛“文芸”が、当時の対外拡張的な時流を反映し、自己の姿をさらに変容させる様子が映し出されているだろう。

こうした様子は、日清戦争の影響を受け、明治29(1896)年に小松直之進撰『軍人亀鑑 宋岳忠武伝』なる書物が中央から離れた秋田で刊行された事例にも現れている。この書は、「天皇」のための「軍人教育」を謳って、岳飛に関する伝や詩文をまとめたものであるが、その書中には、江戸中期の入江若水の和訳小説『通俗両国志』から引いたと思しい李春芳の「序」や、明治維新期の副島種臣の「岳武穆廟」詩が納められているのである。ならば、ここには、——明の“北虜”の圧力に連動して出現した『精忠録』の一部が、明小説『大宋中興』に取り込まれ、日本に将来された後、さらにその序が江戸の和訳本『通俗両国志』の冒頭を飾り、それが日清戦争に連動して、明治期の民族主義的な書籍『軍人亀鑑 宋岳忠武伝』の中に、幕末維新期の文芸とともに取り込まれる——という、“忠義・忠国”なる主題性をもつ文芸と、軍事色を帯びた時流（教育政策を含めた）との乱反射の関係が如実に表れているだろう。

そして、この乱反射の関係は、李春芳「序」付きの『通俗両国志』を納める通俗軍談の叢書『通俗二十一史』全12巻の登場にもつながっていく。この叢書は、京都大丸呉服屋店主の下村正太郎氏が早稲田大学図書館に寄贈した「通俗二十一史」を主な底本とし、明治44-45(1911-12)年にかけて、早稲田大学出版部が出版したものであるが³⁵⁾、叢書巻1冒頭に

35) 『通俗二十一史』巻1開頭「通俗二十一史原本の全備に就きて」

附された「緒言」では、若水の『通俗両国志』を含めた通俗軍談群の刊行の目的や効用が、次のように述べられている。

まず、「緒言」の「支那軍談書の薫化」項で、中国の歴史を扱う通俗軍談には「一般に尚武の氣象を鼓舞し、正善の慕ふべく邪惡の卑しむべきを知らしめ、人格の育成」に効果があるとの指摘がなされた上で、同「支那史研究の必要」項で「今や支那は正に世界列強の角逐場たり。支那と唇齒の關係にある本邦の爲に、支那の史的研究が、如何に切要なるかは、之を言ふを要せず」との世界情勢に鑑みた中国研究の重要性が説かれる。次いで、同「歴史は感想なるべからず」項にて、しかし“二十一史”や『綱鑑易知錄』といった無味乾燥な史書では到底通読できないとの指摘がなされ、同「学界の慶事」項で次のように論じられる。

趣味娯樂の間に、知らず識らず歴史の大要に通ずるに非ざれば、到底史的智識を得るを能はざるなり。然るに前掲二十一種の軍談書は、正史の粹を抜きて之に豊富の趣味を加へしものなれば、二十一史の和解と見るべく、又、二十一史の精華ともみるべきものなり。故に是等の書に依れば、娯樂の間に支那史の心髓を得べきなり。

つまり、『通俗両国志』を含む娯樂通俗文芸『通俗二十一史』の必要性が、軍事色を帯びた中国をめぐる世界情勢における、尚武の氣風の鼓舞と道德的人間の形成、という当時の時流の要請に、強く関係づけられて説明されているのである。もちろん、『通俗両国志』の内容自体は、入江若水の“翻訳”当初の姿と基本的に変わらない。だが、こうした名目のもと、『通俗両国志』を含む『通俗二十一史』が、大学教育にも関わりのあった早稲田大学出版部³⁶⁾から刊行されたという意味は、「教育聖旨」以降の教育政策と当時の時流と娯樂文芸の關係において、看過されるべきではない

だろう。

ただし、こうした現象に冷めた目を投げかけていた人物も当然いた。実際、早稲田大学を創建した大隈重信（1838－1922）は、岳飛の“忠義”と日本の世情について以下のような皮肉を述べている。

本来支那は文字の国でね、文字が豊富だから扇動には持って来いである。彼の誇張した巧みな修辞で、国家の興廃今日にありといった調子の文句をさらに並べて檄文を飛ばす、或いは演壇に立って悲歌慷慨する。そこで無智な民衆がワッと騒いで見るんだ。秦檜が岳飛を殺そうとして中丞何錡に命じて之を鞫問させたら、岳飛は衣を裂き、自ら其背を示したが、背に尽忠報国の文字が鮮やかに刻み込んであったというんで、大変な事のように日本人などの間には伝えられて居るが、何も珍しい事は無い。…岳飛も矢張り其出身を見れば、一介の無頼漢たるに過ぎぬ、曾て法を犯して罪に問われんとしたのを救われて、功を建てて罪を償わされた者だから、背中の入墨位は当然の話だ。取り立てて言う丈の事では無いんだ。（大隈重信『早稲田清話』「岳飛の尽忠報国」、冬夏社、1912）

（三）、大正・昭和期の岳飛“文芸”

こうした皮肉な言説の傍らで、この後も岳飛の話は「大変な事のように日本人」に伝えられていった。ただし、時代が明治から大正に変わると、岳飛“文芸”の文体にはあきらかな変化が生じていた。

例えば、大正 14（1925）、実業之日本社が発行する少女向け文芸雑誌『少女の友』に連載された藤森淳三（1897－？）の少女小説「尽忠報国 岳

36) ただし、『通俗二十一史』を刊行した当時、早稲田大学出版部は大学から分離した組織となっていた。『早稲田大学出版部 100 年小史』（早稲田大学出版部、1986）「出版部の大学からの分離」。

飛武勇譚」である。作者の藤森淳三は、早稲田大学英文科を中退しており、これに先立つ大正10（1921）年には、志賀直哉（1883-1971）から影響を受けていた若き日の横光利一（1898-1947）らと同人誌「街」を創刊させるなど、西欧文学の影響のなかで小説の表現技法を模索していた人物であった。

こうした背景のもと、大正末期の藤森が描いた岳飛小説は、言文の一致した、会話を多用した短文系の文体で構成されている。例えば、大正14年8月『少女の友』18（8）掲載の「尽忠報国 岳飛武勇譚」（2）の書き出し部分である。

ひと月ばかり経った。ある日岳飛は身に覚えのない罪で劉將軍の前に引き出された。

「しぶとい奴め、こうなった上はなんと云いくるめようと無駄じゃ。有体に申せ」

「と申されるのは一体何事でござりますか」

岳飛には何のことなのか、とんと合点がゆかぬ。

…ははア、この間兜を割った士が讒言したなと気がついたが、それにしては白状しろ、白状しろだけでは、あの男はどんな偽りを申し立てたのかさえの見当がつかぬ。

というように、地の文、会話文、モノローグが短文系の言文一致体で羅列されている。これは、幸田露伴、笹川臨風の文体とは全く異なる。ここに、岳飛“文芸”の文体は、漢文調のくびきから解放されたのである。

加えて目を引くのは、少女雑誌でよくみかける少女漫画の絵にもよく似た華麗な挿画が、各ページに附されていることである。これは、それまでの岳飛“文芸”にはない新たな描写手法であり、当時の少女読者の心をつ

かむために加えられた要素であったと考えられる。ただし、この新しい描写手法も、「画像」を用いての“忠孝”の概念の涵養という「教学聖旨」以降の大きな枠組みを超えないものであった。このことは、文中に「国を愛する念」「君に仕えては忠」「忠義」「国を思う」「忠臣」等の語が、従来通りくり返し使用されていることにもよく現れている。

そしてもう一つ、大正 14 (1925) 年 3 月から昭和 3 (1928) 年 7 月にかけて、猪狩史山（又蔵。1873-1938）による小説「岳飛」全 80 回が、三宅雪嶺（1860-1945）や杉浦重剛（1855-1924）らが創設した国粹主義団体政教社の雑誌『日本及日本人』に連載された。著者の猪狩又蔵は、東京文学院哲学科を明治 26 (1893) 年に卒業した後、中学校教員を経て、東宮御学問所御用掛となった杉浦重剛のもとで、「倫理」の進講の草案づくりを手伝った人物であった。

小説の最終回末尾に見える「附言」に、「大体を説岳全伝から写した」「私は支那語が出来ないから説岳全伝を其のまま翻訳することは出来ません。矢張り大体を借りて自分で勝手にまとめたことになりました」とあるように、猪狩は清の『説岳全伝』（『説岳』）に依って本作の骨子を構築したようであるが、藤森の作とほぼ同時期に書かれたその文体は、やはり会話文を多用した短文系の言文一致体で構成されている。例えば、第 6 回に書かれた岳飛の武芸考試の場面である。

周侗先生は岳飛とともに茶屋に休息していたが、忽ち岳飛を呼んで、
「聴け聴け。箭羽根の音はするけれどもサッパリ太鼓が鳴らないネ。
あれは皆当たらないのだよ」

「そうですか。当たれば其の度ごとに太鼓が鳴りますか」

「そうじゃ。もう麒麟村の順番が来るだろう」

「三兄弟がよくやってくればよいですネ」

「大丈夫、間違いは無いよ」

この部分は、『説岳』第5回「岳飛巧試九枝箭、李春慨締百年姻」の以下の部分をもとにしていると思われる。

那周侗和岳大爺在茶篷内，側着耳朵，聽着那些武童們的射聲。周侗不覺微微含笑。岳飛問道：“爹爹爲何好笑？”周侗道：“我兒，你聽見么？那些比箭的，但聽得弓聲箭響，不聽得鼓聲響，豈不好笑么？”³⁷⁾

このように、『説岳』の大意と筋を踏襲した上で、読者に説明を要する部分や、改変を要すると猪狩が判断した部分に、会話や地の文などの削除・挿増を行っている。

こうした執筆態度のなかでも注目されるのは、「忠義」「忠孝」「忠臣」「忠勇」「誠忠」といった忠孝を称揚する語とともに、「国家の爲」「国事」「公に奉ず」「大本營」「大元帥」「軍人として」といった言葉を多用していることである。例えば、「岳飛」(44)「67：二美人（下）」(『日本及日本人』1926年12月15日号)に見える、岳飛の部下・湯懷と孟邦傑を樊家莊の樊瑞がもてなす場面である。

「いや御両所は国家の爲とはいえ誠に御苦勞に存じます。方今我が宋室に於ては不幸続出し、奸臣権を弄する有様でありますから、真に国事を憂い、誠忠を捧げて公に奉ずるのは、サア御両所の兄たり將たる岳元帥位のものでありましようか。私も蔭ながら元帥の忠勇を敬慕して居るのであります。どうぞ御両所も遠慮なくお過ごし下され」

37) 大連図書館蔵錦春堂本を底本とする上海古籍出版社の排印本『説岳全伝』より引用。以下同じ。

この台詞の元となる『説岳』第35回「九宮山解糧遇盗、樊家莊争鹿招親」の樊瑞の言葉は「二位將軍在外，終日在兵戈叢内馳騁，還念及家中父母妻孥否」のみであるため、猪狩が執筆の際に「国家」「国事」「公」「誠忠」「忠勇」等の語を入れ込むことで、国家主義的色彩の強い台詞に改変したのは明らかである。彼のこうした論調は、小説「岳飛」の連載開始の一つ前の『日本及日本人』大正14年紀元節号の「武士道の華やかなりし頃」特集に寄稿した随筆「岳飛」にも強く現れている。

忠孝とか、信義とか、廉潔とかいうことは、何時になっても美しいことであると思う。…岳飛は猛然として起って金の兵と戦ったのみならず、…三面六臂の働きをして、それが皆「君国の爲め」という一精神から出発しているのである。此の間に於ける、彼の英姿は、真に武士道の華である。…平和主義の奸相秦檜の爲に陥られて、裁判官の前に立たなければならぬようになった時、衣を裂いて「尽忠報国」の四字を入墨した背中を裁判官に見せたなど、何たる立派な振る舞いであろう。（猪狩史山「岳飛」）

このように、猪狩は岳飛の“忠義・忠国”の主題性を、当時の国家主義と地続きの“武士道”思想に結びつけていた。猪狩が述べるような国家主義的観念と結びついた“武士道”は、明治期以降に富国強兵を成し遂げるために再構築された思想であった³⁸⁾。こうした論調は、第一次世界大戦(1914-18)後の反動不況や関東大震災(1923)後の震災恐慌に伴って民間で活発化していた国粋的論調を背景とするものだったと考えられる。かくて、日本における岳飛“文芸”は、時流との相関性のなかで“武士道”

38) 明治期以降の“武士道”については、小島毅『近代日本の陽明学』（講談社、2015）「IV 帝国を支えるもの—カント・武士道・陽明学」他参照。

思想まで抱え込んだのである。

この後、日本における国家主義・軍事的な時流は、昭和初期から10年代かけて強まっていくことはよく知られる所である。そして、日中戦争(1937)の開戦を経て、太平洋戦争が始まった翌年の昭和17(1942)年2月から4月にかけて、大日本興亜同盟の雑誌『興亜』に国枝史郎(1887-1943)の小説「岳飛」が挿画付きで連載された³⁹⁾。作者の国枝史郎は、藤森淳三とおなじく早稲田大学英文科を中退した後、大正期の「大衆文芸」運動で勃興した伝奇小説ジャンルで主に活躍した人物である。

この小説の色彩が、戦時下の時流・時局を踏まえた“民族・国家主義”的なものであることは、掲載誌『興亜』の発行者が、53の民族主義団が集まって結成された大日本興亜同盟⁴⁰⁾だったことによく現れている。話の骨子は『宋史』などに書かれる事跡に依ったものとなっているが、地の文、会話文、モノローグすべてに、“忠君・忠国”的な主題性を強調するために、感嘆符「！」を多用する箇所が目立つ。

- ・「機会が来た！ 今、君国のために力をつくさないで何時つくすというのだ！」
- ・すなわち、オール、オワ、ナッシング！ 俺の云う通りになって、宋朝に仕えるか、それが厭なら死ね！ 殺すぞ！ これであつた！
- ・宋の以前の首都汴京！ この汴京さえ攻略したら、中原恢復を大半成功させたことになるのだ。…汴京攻略！ 汴京攻略！ それも、もう一息だ！

このほか、「忠義」「君国」「尽忠報国」「忠臣」「忠節の士」「精忠」「勇

39) 本作は末國善己編『国枝史郎歴史小説傑作選』(作品社、2006)にも収載される。

40) 大日本興亜同盟は、翌1943年に大政翼賛会の興亜総本部に吸収合併された。

武」「義士」など従前の岳飛“文芸”で使用されていた語とともに、「お国の爲」「赤誠」「至誠」「草莽」「誠心」など、日中戦争から太平洋戦争期の国策文芸に頻出する単語も多用されていることは注意される。

しかるに彼は至誠そのもののような人間であった。そこで彼は無位無官、草莽の一人物であるという自分の位置をはっきり認識し、そういう自分に出来ることだけやってお国の爲になろうと決心した。

国枝が『興亜』に小説「岳飛」を掲載した昭和17年2月から4月は、内閣情報局と大政翼賛会の後援により同年5月に日本文学報国会が創設される前夜の時期であった。日本文学報国会が、国家統制のもと文芸を利用して国策を宣伝する団体であったことは周知の事実である。こうした戦時下の時流のもと、岳飛“文芸”は当時の戦時色を勧奨する宣伝の道具ともなっていたといえるだろう。

四、おわりに

岳飛の事跡は、各時代・各地域の社会的動きと関連しながら文芸化されてきた。岳飛の事跡の“文芸”化それ自体は、岳飛の死後まもない、孫の岳珂（1183－1243）が編纂した『金陀粹編』『金陀粹続編』の登場からすでに始まっていた。祖父・岳飛の功を説く岳珂のこの編著が後の岳飛の評価に与えた影響は大きく、『宋史』巻365「岳飛」伝も『金陀粹編』『金陀粹続編』の内容に依っている部分が多い。ここである程度、岳飛“文芸”の“忠義・忠国”という主題性はこの時点で形成されはじめていたとも言えるだろう。

かくて、岳飛という素材は、“忠義・忠国”的観念が求められる時流と

の適合性が良いものとなった。明の中後期の“内憂外患”のなかで、当時の時流と岳飛の“忠義・忠国”という主題性が相互に作用し、数々の通俗文芸を生み出したという現象も、こうした文脈のなかで読み解くこともできるだろう。

こうした構造は、日本における岳飛“文芸”の受容・展開にも見えるものだった。江戸初期に、漢籍を理解することのできる高級識字層に、史書や伝記、詩文を通して徐々に浸透していった岳飛に関する知識は、段階をふんで、日本漢詩や絵図、和訳小説などの“文芸”となって表出した。そして、その表出の仕方にも、時流との相関性があった。日本においても、江戸後期から幕末における社会の不安定さや、明治以降の近代学校教育の出現と浸透、そして対外拡張などといった時流の変動を背景として、岳飛“文芸”は裾野を広げ、その主題性の表現の手法、そして内包する思想まで変容させていったのである。

こうした現象があきらかに存在するならば、文芸研究を行う際、その素材となるものそれ自体がもつ性質や内容の検証と同時に、その背後に存在する社会や時代の様相を理解・分析していく必要性が改めて求められるのではないだろうか。

※本稿は、科研課題「明内府制通俗彩絵本から見る近世中国通俗文学と視覚文化の関係」（2019－21年度採択、若手研究、課題番19K13089）の研究成果の一部である。